

【ハمام】と聞いて、青い空に乾いた大地そして蒸し暑いサウナに望郷の思いが膨らむあなたは相当なアラブ通と言える。

【トルコ風呂】と聞いて、なにやら懐かしい甘い思いに体の一部が膨らむあなたは、なかなかのエロと言える…。

トルコ風呂

もう20年も前の話だが、日本に留学していたあるトルコの青年が、『日本のトルコ風呂のサービス、つまり女性によるサービスはトルコには無いので、これをトルコ風呂と呼ぶのは止めてください』と主張し、全国のトルコ風呂が一斉にソープランドという名前に変わった話は有名である。16年前に香港を旅した時には、【トルコ風呂】なる表示を見たが、トルコ風呂じゃあなんか今一つである。ソープランド、なかなか絶妙な名前を付けたもんだ。

比較文化学者の私としては、トルコの青年が言うように、本当に女性によるサービスはないのか、を検証しなければならない。

何でも近年、トルコ風呂は段々と観光化され、水着を着て、男女一緒に入る事が出来るらしい。でもそんなの駄目だ。やはり観光地ではなく地方のトルコ風呂(現地の呼び方ではハمام)に行く必要がある。

街の片隅にひっそりと建っているハمامに入ってみることに。ちょっと怪しいぞ。

入ると薄暗いロビーがあり、2畳ほど小さな部屋に通される。そこにあるのはベッド。

おおっ、もしま、このいかがわしい狭い部屋でサービスを受けるのか、と思ったが、それじゃあ全く“風呂”にならない。

ここは単なる着替え室なのであった。

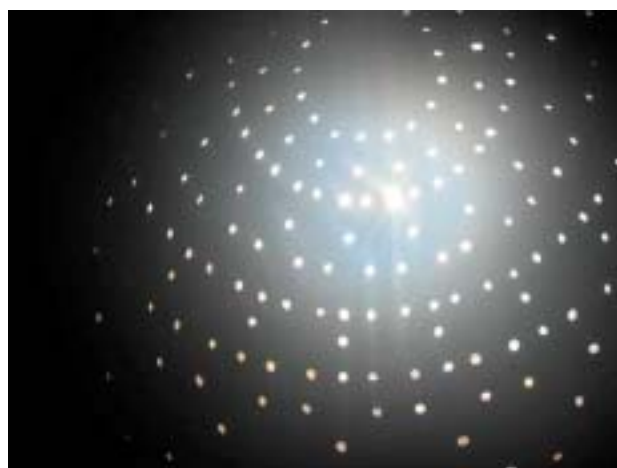
ここで布一枚になる。奥へ進むと、眩しいくらいに明るい部屋がある。

チュニジアで行ったハمامとは比較にならないほど明るくてきれいな部屋だった。天井はドーム状になっていて、小窓がたくさん切られている。太陽の光がふんだんに注ぎ込んでとてもきれい。

中央に4メートルはある六角形の台がある。ここで垢すりをしてもらい、洗ってもらい、マッサージを受けるみたいだ。

でもそこにいるのは確実に男どもだった。

まずはサウナへ行き、順番を待っているという。20分くらい入っていた。汗びっしょり。もう耐えられないという頃、呼び出しがあった。



ハمامのドーム状の天井に空いている小窓。プラネタリウムみたいでとてもきれい。

まずは垢すり。出るわ出るわ。以前チュニジアでやってもらった以来だから、ざっと9ヶ月分である。

トルコ風呂、英語で言うとターキッシュバス。日本語に訳すとトルコ式ソープランド。垢すりの次は、その名の通りソープたっぷりの洗いであった。

チュニジアの時は、ごく普通に石鹸をスポンジに塗って体を洗ってくれたが、本家のトルコ風呂は違う。

でかいタライにこれでもか、というほど泡立てておいて、それをタオルですくって体に乗せるのであった。まさにソープランドと言える。そしてマッサージを兼ねて体を洗ってくれるのだった。



ハマムのスタッフ達。毎日毎日暑い場所で擦る、洗う、揉むの作業をする。結構ハードな職業だなあ。

確かに気持ちがいいが、これをやってくれるのが女性だったらなあ、とかなり男心の核芯、いや核心に迫るものがある。

海外の技術を持って来て、日本式に替え、もっと良いものを作り出す日本人気質。その一端を見た気がする。すごいぞ日本人。

一連のサービスは全部合わせて10分程度だったと思う。トルコは結構やり方が粗い気がする。チュニジアの方が丁寧で、マッサージもタイマッサージみたいで気持ちよかったなあ。そんな訳で、まとめてみるとこんな感じ。

国	サービス内容	金額	コメント	勝手な評価
日本	すごいらしい。	とても高い	いつか行ってみたい気もする。200年も続けば文化になるのかなあ。	きっと10点
韓国 (韓国垢すり)	垢すり、洗い	1500円ぐらいだったような	さすが本家の韓国垢すり。実に上手くて恥ずかしいくらい垢が出る。	8点
中国 (中国垢すり)	垢すり、洗い、 マッサージ	800円	さすが人件費が安いだけになかなか丁寧にやってくれた。時間も長い。	7点
チュニジア (ハмам)	垢すり、洗い、 マッサージ	500円	マッサージはタイ式のボキボキ系。痛いのが気持ち良い。	8点
トルコ (ハмамもしくはターキッシュバス)	垢すり、洗い、 マッサージ	900円	本家のはずなのに、行った2軒ともやけにあっさり終わった。マッサージなんか軽すぎでがっかり。しかも安くない。まあ、店によるんだろうけど。	5点

トルコのバス

前回バスの事を書いたがその続き。

自転車を搬入してくれたバス会社のスタッフが、そのまま添乗員として乗っていることに驚いた。トルコのバスは添乗員付きなのだった。ところが良く見ると、添乗員が二人もいる。どうも長距離バスの場合は、行きと帰りで交代するみたいだ。同じ理由で運転手も二人いた。

乗って間もなく、まず水のサービスを始める。

さらに何だか良く分からない液体を配っている。客は手に受け取って、それを顔や首にすり込んでいる。

『それって何?』と聞く暇も無く手のひらに受けてしまった私も両手にすり込んでみた。ひやんとする。アルコール溶液だ。そこに匂いがつけてあるらしく、良く言うならレモンの香水、普通に言うならトイレの芳香剤の臭いである。

みんな好んで受け取るので、あっという間にバス中がトイレに変わってしまった。隣の席は男性だったので、思わぬところで連れションの気分。そのままバスはトルコの道路をひた走る。

このトイレの臭い、しばらくすると手からは消えている。なのにバス中がまだトイレの雰囲気である。何と添乗員、冷房の吹き出し口へ向けて、今度はスプレーをしていた。ちょっとやり過ぎじゃねーか。

その連れションタイムが済むと、今度はコーヒーorティーorコーラタイムだった。

そしてそれが終わると、パンケーキタイム。小さなお菓子の様なものだが、何とも贅沢なサービスである。

しばらくしてさらにコーヒーorティーorコーラタイムがあって、水タイムがあって、すぐさま次の連れションタイムがあるのだった。

8時間も乗るのに、チケットは20Mリラ(1500円)なのである。

飲み物代に加え、一体人件費はどこから捻出するんだろう(因みにバスはベンツ。そしてトルコのガソリンはリッター2Mリラ(150円)と高いのだ。座席は半分以上空席だし...)

日本人の私には十分安いけど、正直に言うと、こんなサービスはなくてもいいから、貧しい人の為にもっと安くしろよ、という気がしないでもない。

そういえばもう1つ。トルコのバスはトイレが使えない。だから途中で何度もトイレ休憩がある。この8時間の行程でも、30分、20分、10分と合計3回もあった。トイレ休憩は、どうもバス会社と、サービスエリアの会社で結託している感じだった。そしてトルコのトイレは有料である。平均すると、0.4リラほど(30円)。まあきれいにしてくれているなら良いんだけど、たまに汚いとかかなり損した気分になるのだった。



トルコの大型バス。日本とほぼ同じ。座席は2列2列で、南米の様な3列の超豪華バスは見なかった。

温泉へ行く

そんな訳で、トルコの首都アンカラから、8時間バスに揺られて、夜中の2時過ぎにシーバスというトルコ東部の大きな街に着いた。夜中に着くバスは外国では危険なのであまり利用しないことにしていたが、トルコは本当に安全な国なので乗ってみたのだった。

トルコの大きなバスターミナルには、だいたい”ターミナルホテル”か、”ホテルターミナル”という名前のついた宿がある。だからトルコのバスの旅はなかなか楽なのだ。

ここシーバスにもターミナルホテルがある。ただし値段は安くない。何とか交渉して、結局20Mリラ(1500円)に負けてもらった。

翌日はこのシーバスから2時間掛けて、さらに東部のカンガルという地方都市へ行く。そのカンガルで今度はタクシーに乗り15分ほどで目指すバルクル・カブルジャという温泉に着くのだった。

タクシーは35Mリラ(2625円)と吹っかけてくるが、相場は15Mリラ(1125円)。メーターではこのぐらいになるらしい。私の場合は『お金がこれしか無い』と言い張って、7.5Mリラ(563円)で決着。

結局、アンカラからここまで乗り物に乗っているだけでも10時間以上、お金にすると交通費は2300円も掛かる。

ほとんどクレイジーって感じだが、ここの温泉に来るのは訳がある。

何と温泉に小魚がいて、人間の皮膚についた垢などを食べるという噂なのだ。温泉研究者としては外せない一品である。



バルクル・カブルジャ温泉

温泉施設の入り口で4Mリラ(300円)を払い、中に入る。ここは保養所もしくは療養所みたいになっている様だ。宿泊施設も整っているし、散歩コースもある。敷地の中を小川が流れている。この小川が実は温泉で、そしてその小川には、魚たちが住んでいるという話だ。山から流れてくるお湯を溜めて入浴できるようにしているのだが、魚たちもそのまま湯船にやってくるという仕組みらしい。

温泉はトルコらしく男女別になっている、小学校のプールの様な作りになっている。何となく味気ない。

金属の手すりにつかまって温泉につかる。何だ温かくないじゃないか。というのもこの日はものすごく冷えていて、多分気温10度くらい。まだ9月中旬なのだが、どうも現在トルコに、



はるばる来たのにぱっと見は何だか味気ない、プールの様な浴槽。深さは140センチくらい。

この秋最初の寒波が来ているらしい。

さらにこの場所は標高 1400 メートルなのである。

この日は風もあったので温泉に入った方が寒くないのだが、いわゆる温泉という感じじゃない。35 度程度と聞いていたがだぶん 30 度くらいだ。まあ、そうでないと、熱波が来たら煮魚になってしまう。

プールの底にはジャリがひいてある。魚に配慮しているのだろう。

さて、温泉の中で泳ぐ魚は見えるのだが、どんなものか、とプールの壁に寄りかかってじっとすると、くるわくるわ小魚達。

まずは足の甲。そしてさらにじっとしているとだんだんと上の方まで接近して来て、腹や胸、腕までシャリシャリと体の表面に群れてくる。

5 分もすると、小魚の群れに囲まれて、足は黒い固まりになっている。

ある小魚は吸い付き式、ある小魚はかじる感じ。最初はくすぐったいが、強くかじられると痛い。電気風呂というのに似ている。体の表面に電気が走っている感じ。両足だけで 200 匹ぐらい集まっている感じ。



まず吸い付くのは足の甲。そしてだんだんと登ってくる。ちょっとでも動くと一緒に逃げる用心深さ。

背中をやってもらうと最高だ。背中に性感帯がある人はたいへんな温泉である。

トルコの観光パンフレットによれば、Ph7.8、皮膚病と、リウマチ、神経疾患にいいらしい。トルコ中の医者がこの温泉を勧めると書いてある(通称ドクターフィッシュ)。

この観光パンフレットには、小魚が皮膚に群れる様子が写真入で乗っているが、みんな 2、3 センチの小魚だ。ところが実際に入ってみると 10 センチ以上のやつもいて、そいつにかまれると結構痛い。小魚達、何時の間にか成長しているようである。



魚もだんだん慣れて来て、足だけでなく手や肩、首のあたりまで攻めてくるようになる。

このプールは男女別別になっているが、トルコなので水着着用。でも余りに電流的な刺激が気持ちがいいので、海水パンツをプールの中で脱いでみた。

当然アタックを受ける。

“小物”に対し、何故か大物がやってくるから困ったもんだ。悶えると魚は一斉に逃げってしまうが、結構な快感だったりもする。

さっきから、何だか足の一ヶ所が痛いと思っていたら、何と血が出ていた。水中で自分の血が流れる様子を見たのは生まれて初めてだ。結構しっかり出ていやがる。

ギリシャの蚊にやられたところからだ。刺されて数日間も痒かったのでボリボリやっていたら化膿して、ようやく最近かさぶたが直り始めていたところだったのだ。

ところが何時の間にかそこがふやけて、格好の餌になっていたらしい。

魚たちは徹底してその柔らかいところをほじくるから、何時の間にか1ミリぐらい掘られていて、そこから血が出ていたようである。おまえらピラニアか。

そして、血の臭いを嗅ぎ付けたのか、どうも私の足の回りには大量の魚たちが群れている。おまえらサメか。

1時間ほど、魚に餌をあげ温泉を出す。

着替えながら、よくよく温泉を見てみると、人食い魚の幼魚を飼っている“いけす”に人間が皮膚を直接餌としてあげているという感じがしないでもない。

温泉を上がってからも、例の足の傷からは、やっぱり血が流れている。小魚達、なかなか鋭い刃を持っているようだ。

トルコの後、シリアを通過してヨルダンへ行き、死海につかろうと思っているのに、大丈夫だろうか。

つづく